ア・プリオリ

雷鳴が轟いたその後には
かすかな風が梢を撫でる
陽光は緑に反射して僕の目に突き刺さる
隣に寄り添う愛に満ちた瞳は
生の喜びを語りかける

ああ、雑音に満ち満ちた大気が
僕から遠ざかってゆく
僕に挑戦し、僕を挑発してきた
慄えを帯びた雑音に満ちた大気が
遠ざかってゆく

遂に生はこの僕ひとりのものとなったのだ
何者にも侵すことのできぬものとなったのだ
おお、語りかけるがいい
僕は答えるだろう
「大気そのものとなるがいい」

己が内なる扉に手をかけ
僕はそれを聞く・・・
果てしない浮遊へと出発つため
追う者にとっては恐怖に満ちた迷宮となろうが
それを望む者は僕を追うがいい

永遠の静止と
そして永遠の浮遊と同化したここに
僕はいつでも居るだろう
ここを感じることができる者は己が扉を開くがいい
ためらうことなく・・・
そして大気となるがいい

(1994.1.20)